

〔論文〕

## ジェンダーの知識社会学

——人気マンガからみた日本社会——

早川 洋行

名古屋学院大学現代社会学部

### 要 旨

本論文は、人気マンガを題材にして、戦後日本社会におけるジェンダーの変化を考察したものである。1では、ジェンダーの形式的次元と実質的次元を区別して、後者に注目することに重要性を論じる。2では、知識社会学からのアプローチを説明した後に家族を描いた人気マンガを紹介して、そこに描かれた家族像と時代との関連を考察する。3では、家族ではなく個人に注目して、人気マンガの主人公に表現されている男性ジェンダーと女性ジェンダーの特徴をまとめる。そして4では、これまで論じてきたことを振り返り、現代日本社会におけるジェンダーの歴史的位相を総括する。

キーワード：ジェンダー、家族、マンガ

## Knowledge Sociology of Gender

——A Consideration from a Popular Manga of Japan Society——

Hiroyuki HAYAKAWA

Faculty of Contemporary Social Studies  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2016年10月31日

目 次

1. ジェンダーの深層
  - 1-1. ジェンダーの意味
  - 1-2. 政策課題としてのジェンダー
2. 人気マンガにみる家族像の変遷
  - 2-1. 知識社会学からのアプローチ
  - 2-2. 『サザエさん』の時代
  - 2-3. 『ちびまる子ちゃん』の時代
  - 2-4. 『釣りバカ日誌』と『クッキングパパ』
  - 2-5. 脱家族の時代
3. 変わりゆくジェンダー
  - 3-1. ジェンダーの揺らぎ
  - 3-2. 『クレヨンしんちゃん』にみる男性ジェンダー
  - 3-3. 『美少女戦士セーラームーン』にみる女性ジェンダー
  - 3-4. N型ジェンダーの新しさとT型ジェンダーの古さ
4. ジェンダーの現代的位相

## 1. ジェンダーの深層

### 1-1. ジェンダーの意味

ジェンダーという言葉は、もともとは文法用語である。インド・ヨーロッパ語族の言葉には、男性、女性、中世の区別があった。この区別は、英語やペルシア語、アルメニア語ではほぼ消滅したが、現代でも、スラブ諸語やドイツ語、アイスランド語では残っている。たとえば、ドイツ語では山 (Berg) や川 (Fluss) は男性名詞であり、太陽 (Sonne) や雲 (Wolke) は女性名詞である。ジェンダーとは、はじめはこうした言葉にある性別を意味していた。

ところで、なぜ山や川が男性に結びつけられ、太陽や雲が女性に結びつけられたのだろうか。そこには、その土地の自然環境と結びついた意味世界、すなわち風土の問題があるとみるべきである。

日本では、「山の神」は一般的に女性である。山の神は、春に山から里に下りてきて田の神になり、秋になると山に帰ると信じられている [Naumann 1994, 84, 100]。つまり、山の神は実りをもたらす「産神 (うぶがみ)」なのである。ここには、日本の山が、水はもちろんのこととして、獣や鳥や魚、キノコや山菜や木の実などの食糧をもたらしてくれる豊かな土地であったという事情がある。

ドイツ語で山が女性名詞ではなくて男性名詞なのは、日本とまた違った自然環境とそれに応じた生活があるからだろう。ジェンダーとは、人間が生活のなかで勝手に作り出した意味の性差である。それは社会的文化的なものであるから、当然、地球上の地域によってそれぞれ異なっているし、時代によっても変わる。またそればかりではない。筆者は初めて英語を習った際に、船 (ship) を代名詞で言う場合は、she (彼女) を使えと習ったものだが、これはもはや通用しないようだ。すなわちジェンダーは、時の流れのなかで消滅することもある。

社会学は、ジェンダーを文法用語としてではなく、こうした社会的文化的な性差として再定義して、社会分析の道具として利用するようになった。ジェンダーという言葉は、今や文法用語としてではなく、社会問題を考えるための言葉として用いられることのほうが圧倒的に多い。とはいえジェンダーが、もともと歴史のなかで培われてきた、人々の生活に根差した性差を意味していたことはきわめて重要である。

## 1-2. 政策課題としてのジェンダー

日本社会は近代以降女性の地位向上を進めてきたが、20世紀後半からその流れはより強くなっている。多くの、主として女性たちの力によって、表1に示すように、様々な法整備がなされた。また2001年には、内閣府の設置にともない、それまでであった男女共同参画室を男女共同参画局に改組して、国としての推進体制も強化された。男女共同参画社会基本法が、地方自治体による男女共同参画社会の形成の促進について、各自自治体の「責務」と規定したこともあって、21世紀に入って、全国各地の自治体において男女共同参画にかかわる条例や計画が作られることになった。21世紀になって、フェミニズム運動の主たる舞台は中央から地方へ移った感がある。

表1 ジェンダーに関連した法律

男女雇用機会均等法	1985年成立	1986年施行
	1997年改正	内容強化
	1998年	母性保護規定施行
	1999年	全面施行
	2006年改正	
	2007年施行	ポジティブアクション等
育児休業法	1991年成立	1992年施行
	1995年	育児・介護休業法に改正
	1999年	全事業所へ義務化
	2001年改正	啓発規定追加
	2002年	不利益禁止規定施行
	2009年改正	男性の取得推進等
男女共同参画社会基本法	1999年	

今やどの自治体でも、自らの組織内において幹部職の女性の割合を増やしたり、審議会等に女性委員を一定数確保するための努力をしたりするようになった。またそれぞれの自治体にある企業や住民団体、そして市民への啓発活動も行われている。こうした活動は、少しずつではあるがそれなりの成果をあげてきていると言ってよいだろう。

しかし、注意すべきなのは、こうした努力による女性の社会参加の増加が、それだけで従来のジェンダーの変化を必ずしも意味しないということである。女性の社会参加が進み社会制度が変わったとしても、古い文化は根強く生き続け、根幹はそのまま枝葉の部分だけをわずか変化させるだけのこともある。

例をあげよう。イラスト1は、筆者が暮らす滋賀県栗東市の教育委員会が2014年から2016年まで市民に配った子育てに関する啓発チラシである<sup>1)</sup>。まず、このチラシの女の子と男の子の描かれ方の違いに注目してみよう。

女の子は「ありがとう」と言う、物の受け渡しをする、小さい子の面倒をみるの三つのシーンに描かれている。他方、男の子は、「世の中に出て恥をかかないためのマナー」として描かれている「物を大切に」というイラストを例外として、総じて走ったり発言したりの積極性が強調されている。また女の子のイラストに添えられた言葉は、「感謝」「ぬくもり」「丁寧に」「思いやり」「人を大切に」なのに対して、男の子のイラストに添えられた言葉は、「自分から」「元気」「しっかり」「守る」「自分を大切に」「恥」、そして一人ではなく母親らしき人物との一緒にイラストでは、「強い精神力」「がんばれる力」である。この描き分けは「やさしく家庭的な女の子」「元気で社会的な男の子」というステレオタイプのジェンダー表現であり、固定的な役割期待の表現にほかならない。そして、何より基本的なことを指摘すれば、このチラシには、はっきりと確認できる限りで、全部で13人の子どもが描かれているが、その内訳は、男の子が10人であり、女の子は3人である。これでは、とくに重要なのは男の子の子育てであると言っているかのようである。それだけでも十分に不公平だろう。

次に家族の描かれ方をみてみよう。家族5人の食事風景が描かれ、新聞を読む父親、社会の規範を教える父親とスポーツ活動に付き添って子どもを慰める母親が描かれている。いまだ5人家族が一般的な家族像ではないのは明らかであるが、それを別としても、社会のルールを教える父親、子どもにやさしい母親というステレオタイプのジェンダー表現となっており、これもまた固定的な性別役割期待とみなしうる。

このチラシは、男女が子育てにかかわるべきだと訴えているし、子どもの教育のなかには、当然女の子の教育も含まれると訴えている、と読み取れる。しかし、せいぜいそこまでなのである。注意深く、もう一步踏み込んで、チラシに描かれているイラストと文字の意味を読み取るならば、「男の子は立派な社会人に育てなさい、女の子はやさしく思いやりのある子に育てなさい。そして前者がより重要です」、「子どもに対して、前方で父親が導き、後方で母親が背中を押しなさい」と言わんばかりの、おそらくこのチラシを作った当事者たちにも意識されていなかった、古くて固定的なジェンダー意識が透けてみえてくる。

これまで男性ばかりで担われていた集団や仕事に女性が加わったり、逆に女性ばかりで担われていた集団や仕事に男性が加わったりすることは、男女共同参画の観点から望ましいことだろう。もちろん、それはそれとして評価されるべきことではあるが、しかし、社会的に言ってより重要な問題は、そこでどのような役割が男女双方に割り当てられ、どのような意識で、どのような相互行為が行われているかということである。そうした状況の深部をみない限り、従来型のジェンダーが変わったとは言えないだろう。つまり、新しい男女共同参画社会とは、形式的な参加で実現されるものではないし、またそうであってはならない。

先に述べたように、ジェンダーは社会的文化的に形成されたものである。今日、日本社会で行われている「男女共同参画社会の形成の促進」事業は、たんなる社会改革ではなく、まさにこれ

# 栗東市 子育てのための12か条

## ～ 家庭と地域社会の中で ～

家庭教育は、すべての教育の出発点です。子どもたちは、家族との関わりや経験を通して、人として大切にしなければならぬ基本を学びます。また、子どもたちは、地域社会における様々な体験や人との関わりを通して、社会生活を営むためのルールやマナーなどの社会性を身につけていきます。子どもたちの健やかな成長を願い、子どもに関わるすべての大人が心をつなげて、子育てに関わっていきましょう。

### 人との接し方5か条

<p><b>あいさつは、笑顔とともに自分から</b></p>  <p>元気な声で「おはようございます」、「こんにちは」。あいさつは心と心をつなぐ第一歩です。</p>	<p><b>元気な返事と話し言葉</b></p>  <p>名前を呼ばれたら、「ハイ」としっかり返事をし、「です」「ます」をつけて丁寧に話すことはコミュニケーションの基本です。</p>	<p><b>「ありがとう」の言葉を大切に</b></p>  <p>「ありがとう」は、人に対する感謝の気持ちです。お互いのめくもりを感じられる一言です。</p>	<p><b>物の受け渡しは、丁寧に言葉を添えて</b></p>  <p>相手の顔を見て、言葉を添えて、丁寧に物の受け渡しをすることで、思いやりの心が育ちます。</p>	<p><b>時間を守る</b></p>  <p>時間を守るということは、約束を守るということにつながります。社会のルールを守る基本です。</p>
---	--	--	--	--

### 子どもへの接し方4か条

<p><b>食事は楽しく、和やかに</b></p>  <p>楽しい食事は、子どもの心の栄養です。健やかな子どもの成長のためには、家族団らんは大切なことです。</p>	<p><b>子どもの話を真剣に受け止めよう</b></p>  <p>無表情な受け答えは、子どもを無口に育てます。子どもの顔を見て、にこやかにうなずいたり、相づちを打ったりすることで感受性豊かな子どもに育ちます。</p>	<p><b>「ごめんなさい」で終わらせず、考えさせよう</b></p>  <p>なぜ「ごめんなさい」なのか、理由をしっかりと考えさせることが、規範意識を高めることにつながります。</p>	<p><b>失敗は叱らずに励まそう</b></p>  <p>子どもが失敗したときは、その心を受け止めて「大丈夫」と言って励ましましょう。くじけない強い精神力を養い、がんばれる力を身につけます。</p>
---	--	--	--

### みんなが大切にしたい3か条

<p><b>うそをつかない子に</b></p>  <p>自分にうそをつかないことは、自分を大切にすることです。正直になるということが次なる誇りを正していきます。</p>	<p><b>自分を大切に</b></p> <p><b>人に迷惑をけない子に</b></p>  <p>社会のルールを考えたり他の人への影響を考えたりすることは大切です。正しい判断力を身につけさせましょう。</p>	<p><b>人を大切に</b></p> <p><b>靴や物を整理できる子に</b></p>  <p>はきものをそろえることは、心をそろえることです。世の中に出て恥をかかせないためにもマナーを身につけさせましょう。</p>
---	--	---

栗東市教育委員会 幼保保・保育部・幼稚園保護者代表連絡協議会 栗東市PTA連絡協議会 栗東市自治連合会 栗東市民生委員児童委員連絡協議会 栗東市女性団体連絡協議会 栗東市オーケストラクラブ 栗東市商工会 栗東ライオンズクラブ 栗東青年会議所 国際ソロファミスト浜海 栗東市少年棒球隊委員会 栗東市青少年育成市民会議 (イラスト：中川 真二)

イラスト1 栗東市教育委員会が作成したチラシ

までの文化を変えようとする運動だとみなすことができる。文化の多くは、意図的に形成されたものではない。意図せざる結果として形成され変化してきた場合がほとんどであろう。だから、これは難事業である。

よく知られているように、マックス・ヴェーバーは、社会的行為を4つの理念型で理解しようとした。ジェンダーはこのうち、伝統的行為に深くかかわっている。ヴェーバーは、伝統的行為を「意味的行為を有する行為と呼び得るものの正に限界」にあるものであって「見慣れた刺激に出会った途端に、以前から身につけている態度のままに生ずる無意識の反応に過ぎぬことが非常に多い」と述べた。しかしまた彼は、伝統的行為は意識的に維持されることもあるとして、「単なる慣習の持つ安定性というのは、主として、周囲の多くの人たちの行為が現実に慣習の存続に関心を持ち、それにしがった態度を取っているため、自分の行為を慣習に従わせない人間は不適切な行為を行う結果になり、大小の不利益を蒙らざるを得なくなるということから来ている」とも述べた [Weber 1922, 訳39, 49]。

男女共同参画社会への歩みは、こうした伝統的行為との軋轢を避けて通ることはできないだろう。

## 2. 人気マンガにみる家族像の変遷

### 2-1. 知識社会学からのアプローチ

女性の社会参加を計る指標はいくつかある。女性の就業率はその最たるものである。しかし、そうした統計的データは、外形的な男女参画をとらえることはできても、これまで述べてきたような「深層のジェンダー」をとらえるのには限界がある。日常生活のなかで感じる、人々の行為や意識の様式としてのジェンダーを顕在化させ、議論の俎上にのせるにはどうしたらよいだろうか。ここでは知識社会学の観点からこの課題に迫ってみたい。

知識社会学は、主体の存在と意識、思想、作品の相関性に注目する社会学である。それは、意識、思想、作品から、それを生み出したり支持したり嫌悪したりする主体の存在、そしてその主体が生きる社会を考える社会学とも言える。ここでは、こうした知識社会学のパースペクティブを採用して、とくに人気マンガに注目してみよう。

これは、マンガに限らないことだろうが、ある娯楽作品が大衆的な人気を博したとしたら、その娯楽作品には、多くの人々の潜在的欲求に適う何かがあると考えてよいのではなかろうか。ここには二つの意味がある。ひとつは、作品の意味の重要性であり、もうひとつは、作品の意味の普遍性である。

前者に関して言えば、その娯楽作品が読者にどのような共感やカタルシスを与えるものであったかが問題である。作品が人気を博した理由、その作品の意味を解明することが知識社会学の課題になろう。また後者の問題にかかわって、その娯楽作品が多くの人々に人気があったとするならば、それは、個人的で特殊な事柄ではなく社会的で普遍的な事柄とみるべきである。すなわち、人気作品を分析することは、その時代、その社会に生きる人々の存在を考えることにつながる

言ってよいだろう。

さて、ここではジェンダーの問題を考えるので、まず、この問題を考えるうえで欠かせない「家族」が重要な要素として描かれている人気マンガという観点で、『サザエさん』（作：長谷川町子）、『ちびまる子ちゃん』（作：さくらももこ）、『釣りバカ日誌』（作：やまさき十三）、『クッキングパパ』（作：うえやまとち）の4作品を取り上げることにする。これらは、いずれもアニメやドラマあるいは映画にもなった人気マンガである。ただし、作品は、続いていくうちにその内容を変えていくこともあるので、基本的に最初に発刊または放映されたものを論述の典拠にすることにしよう。

## 2-2. 『サザエさん』の時代

『サザエさん』は、1946年から1974年にかけて『夕刊フクニチ』『朝日新聞』などで連載された新聞マンガであるが、1969年からはアニメ作品として放映されて国民的人気を博した作品である。そのほか映画やテレビドラマ、舞台作品にもなっている。様々な媒体に登場し、半世紀以上のロングランを続けている作品なので、同じ原作から生まれたものとは言え、制作年やそれぞれの作品によって登場人物の設定や性格にはばらつきがみられる。とはいえ、どの作品にも原作を損なうような決定的な違いはみられない。ここでは、今の人々にもっともなじみがあると思われるアニメ版を念頭に論じることとする。

サザエさん一家は、三世代家族である。サザエは、夫であるフグ田マスオ、息子のタラと一緒に実家に同居している。父母である磯野波平、フネ、弟のカツオ、妹のワカメを含めた7人家族である。波平とマスオはサラリーマン、フネとサザエは家事専従者（主婦）である。サザエさん一家は、裏のおじいちゃん、おばあちゃんや伊佐坂家や三河屋の三郎などと濃厚な近隣づきあいをしている。こうした近隣関係の豊饒さのもつ意味については、鳥越皓之が『「サザエさん」的コミュニティの法則』で詳しく論じているので、ここではふれる必要はないだろう〔鳥越2008〕。

さて、新聞に連載された『サザエさん』については、これまで多くの論者によって論じられてきたが、それらにほぼ共通しているのは、戦後民主主義を読み取る見解である。

たとえば、作田啓一らは「サザエさんは、生活に根をおろした戦後の力強い女性の象徴」であり、「戦前のモラルから解放された女性には、きわめて身近な存在」とみなして、「共感できる強い食欲」、「好奇心に満ちた積極性」、「平等の家族主義」の三点を指摘する〔作田他1965, 136-139〕。

また鶴見俊輔は「父親が、娘に言われて、自分言ったことのおかしさに気がつき、いちはやく笑いだしてしまうところに、いかにもサザエさん一家の家風があらわれている。このあたりが、戦後民主主義なので、嫌いな人はこのところが嫌いになるのだろう。私には、家庭内に戦前からひきつがれている家長の権威を、このように笑いをもって批判し、権威の側も、みずからをわらうことでかわってゆくという過程が、戦後にたてられた一つの理由であったと思えるし、この理想をうまずたゆまず、二十六年くりかえしている長谷川町子に共感をもつ」と述べた〔鶴見2006, 54〕。

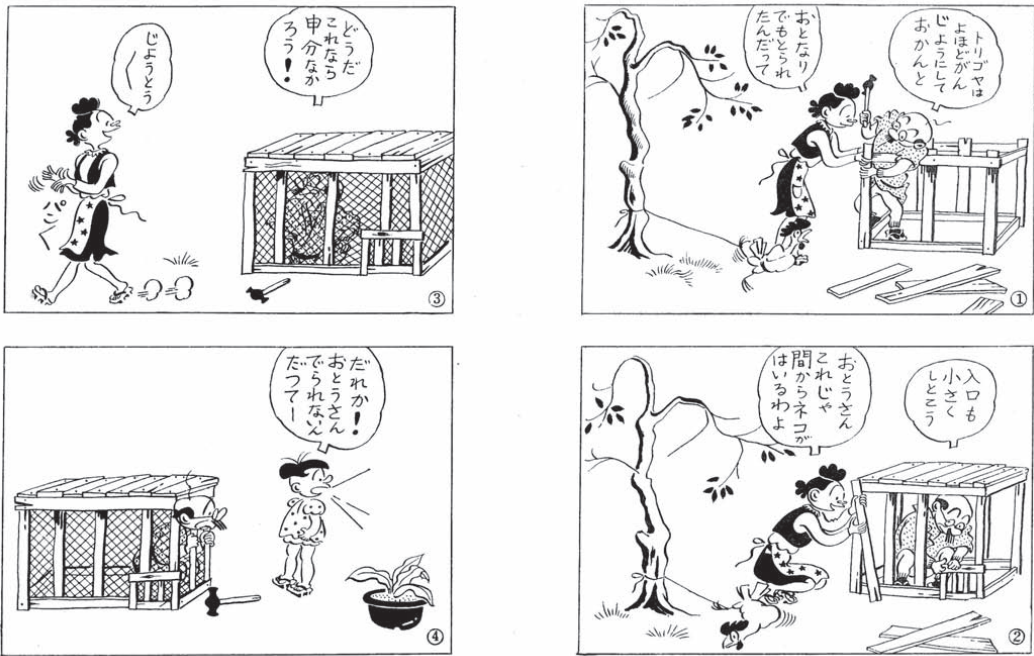


イラスト2 『サザエさん①』長谷川町子全集1, 朝日新聞支社, 1997年, pp. 142-143.

そして樋口恵子は、『サザエさん』は一見保守的な装いをしているが、実はそうではなく、「まともなぶつかれば、連載時に着々と進行し形成された家父長制的企業社会と対立しかねないもの」だとみる。樋口によれば、サザエさんに特徴的なのは、「嫁」としての役割が欠けていることである。サザエは「女系家族のキーパーソンであるだけではなく、よく見ると随所でストレートに男女平等を主張している」「フェミニスト」であり、「日本の『嫁』たちにとって、『家』から解放された『嫁』メルヘンのヒロイン」だという〔樋口2006, 116-150〕。

ところで、こうした分析は、新聞や単行本に発表された『サザエさん』を分析対象にしている。これに対して、テレビアニメ版は違うのだという見解もある。中野恵美子はテレビアニメ版の2話（「波平、凧をげる」1995年1月15日、「ワカメの花嫁修業」1994年8月30日）を分析して、これらとは対照的な解釈を提示している。

中野によれば、『サザエさん』は「伝統的な家父長制と従順な子どもたち」を描いた作品である。それは磯野家の食卓の情景において男性たちに広いスペースが与えられていること、波平が横柄な言葉づかいをしていること、カツオが波平に従順であること、ワカメに花嫁願望があることなどから見てとれる。中野は、つまるところ磯野家は「磯野波平を中心とする家父長制的な雰囲気支配されている」と断じている〔中野1998, 107-117〕。

はたしてそうだろうか。筆者はこの中野の理解に強い疑問を感じる。最大の疑問は、中野は『サザエさん』を論じながら、そのなかに主人公であるサザエについての言及がほとんどないことである。主人公をおざなりにして周りの登場人物の性格分析等から、作品の意味を考えるのは、は



たして妥当なことだろうか。また、作品全体のプロット（筋）を無視して、座席の配置や個別の言動だけを取り上げて分析するのは、いささか単純で皮相的すぎると言われても仕方ないだろう。さらに言えば、分析対象として、この二つの話を選んだ根拠がなんら示されていないことにも疑問を感じざるを得ない。

『サザエさん』の映像作品は、ビデオやDVDとして市販されていない。したがって、残念ながら、中野が考察対象とした2話を再検証して反論することは困難である。しかし、テレビアニメ版の『サザエさん』作品のいくつかは、ユーチューブ等の動画サイトで公開されている。そこで、比較的入手しやすいアニメ版第1話「75点の天才」を題材にして、分析してみることにしよう。（<https://www.youtube.com/watch?v=FbbFLcmjz8I>, 2016年6月30日確認）

カツオがテストでよい点数（75点）をとって浮かれて帰ってくる。フネ、サザエ、ワカメに自慢するが、ワカメに、それ以前の悪い点数の答案を見つけられる。カツオは、あわてて答案を天井裏に隠す。そこにハマコ叔母さんが来訪。サザエはカツオがテストでよい点数をとったことを伝えようとするが、答案が見つからない。家捜しするうちに、マスオと波平が帰宅。マスオの「へそくり」と波平宛てのラブレターが見つかり、二組の夫婦喧嘩が始まる。天井から答案用紙を持ったカツオがネズミとともに落ちてきて、驚いたサザエはマスオに抱きつき、波平はフネに抱きついて仲直り。一家は、見つかった「へそくり」で外出に出かけ、ハマコ叔母さんは忘れられて留守家に取り残される。

これがテレビアニメ版第1話のプロット（筋）である。たしかに波平は家捜しするフネに向かって、「落ち着きなさい。みっともない」と叱る。それを権威主義的と言うこともできようが、結局隠しごとをした男性三人は、波平に従順とされるカツオも権威者とされる波平も、女性たちからひとしく糾弾を受ける。また、驚いた拍子にサザエはマスオに抱きつき、波平はフネに抱きつく、というのも面白い。鶴見が看取したように、波平は権威者でありながら、自らそうした権威主義的態度を捨てることになんら躊躇しない。やはり磯野家の「家風」は健在である。

やはり、「サザエさん」を伝統的な家父長制と言うには無理があるのではなかろうか。もっとも、筆者は『サザエさん』に家父長制的の意味がまったく読み取れないと言うつもりは毛頭ない。波平に家父長制的な権威主義的態度があるのは事実である。しかしそれは、中野が言うような「伝統的な」ものではけっしてなかった。この点で、樋口が「家父長制的企業社会」との対立に注目したのはまったく正しい。上野千鶴子が『家父長制と資本制』で論じたように、家父長制と資本制は歴史上幾度かの妥協を繰り返している、とみるべきだろう [上野1990]。

『サザエさん』は、資本主義社会の進展の下で、主婦というシャドウワークに従事し、マルクス主義的に言うならば「労働力の再生産」に貢献する家族の姿を描いている。しかし、それは樋口がサザエを「嫁メルヘンのヒロイン」とよんだように、けっして暗いものではなかった。むしろ、『サザエさん』は、戦後の民主化していく社会を背景にして、昔よく言われた言葉を使えば「三食昼寝付き」の仕事を生き生きとこなす「輝ける主婦」の姿を描いたマンガだったのである。

2-3. 『ちびまる子ちゃん』の時代

『ちびまる子ちゃん』は、1986年少女マンガ誌『りぼん オリジナル』に登場し、翌年から『りぼん』に連載された。1990年からはテレビアニメ版が放映されたが、視聴率35パーセントという驚異的な数字をはじき出す人気を生んだ。もともとは少女向けのマンガであったが、少女に限らず国民的人気を博した作品だと言ってよいだろう。現在は、中日新聞等で4コママンガにもなっている。

『ちびまる子ちゃん』の舞台は、1974年頃の静岡県清水市である。まる子は、小学3年生。両親（さくらヒロシ、さくらすみれ）と姉（さくらさきこ）、祖父母（さくら友蔵、さくらこたけ）と暮らしている。祖父母は無職。ヒロシの職業は不明。すみれは家事専従者（主婦）。こうした違いはあるものの三世代家族である点は、『サザエさん』と同じである。ただし、長谷川町子が1920年生まれなのに対して、さくらももこは1965年生まれであり、当然のこととして、この時代的違いは作品にも反映している。三点指摘しよう。

まず『ちびまる子ちゃん』に特徴的なのは、学校を通じた人間関係の豊さである。まる子が通う小学校には、たまちゃん、みぎわさん、丸尾くん、花輪くん、はまじ、ぶー太郎、永沢くん、藤木くん、杉山くん、大野くん、野口さんなど多彩なキャラクターがいて、まる子とかかわりをもっている。近代社会は、子どもを家庭や地域社会から切り離して学校に隔離した。また地方都



イラスト3 さくらももこ『ちびまる子ちゃん1』集英社、1987年、pp. 66-67.

市では、私立小学校などめったになかったから、様々な階層の子どもたちが学校で机を並べることになった。

第二に、テレビである。『ちびまる子ちゃん』には、山口百恵、西城秀樹、にしきのあきら、山本リンダ、殿様キングス、ドリフターズ、植木等などのアイドル、歌手、テレビタレント、が度々登場する。これは『サザエさん』との大きな違いだ。父親であるヒロシはナイター中継で巨人戦を観るのが楽しみで、まる子たちとチャンネル争いを繰り広げる。家庭にテレビがある日常生活がごく自然なこととして描かれている。

第三に、家族内の人間関係が垂直的というよりも水平的であることが指摘できる。引用したの単行本第1巻『ちびまる子ちゃん』に収録されている「年越しまるちゃんの巻」のものである。大晦日に、まる子、ヒロシ、友蔵は一緒に大掃除をする。そのうち昔の写真や日記が出てきて、思わず見入ってしまう。掃除が中断して、すみれから叱られる。まる子にとって、ヒロシは父親であり、友蔵は祖父なのであるが、時として三人の関係は「ともだち」ようになる。

総じて述べるならば、『ちびまる子ちゃん』は、当時の大衆社会状況のなかの家族をみごとに描き出していると言えるだろう。親の権威はますます失墜し、他方、主婦としての女性の姿は、サザエさんほどの解放感をもって描かれていない。むしろ主役は、名実ともに子どもであり、家族と友達に囲まれて、個性的な子どもたちが生き生きと生活している。そして、子どもたちの世界では、男女の区別よりも同年代の「ともだち」としての共感が基本的にある。『ちびまる子ちゃん』は、そうした「輝ける子ども」の姿が話の中心に描かれている。

#### 2-4. 『釣りバカ日誌』と『クッキングパパ』

二〇世紀後半日本の大人たちの家庭生活を考える素材として、『釣りバカ日誌』と『クッキングパパ』を取り上げよう。

『釣りバカ日誌』は、一九七九年から小学館の大人向けマンガ雑誌『ビックコミック オリジナル』に連載され、その後、テレビアニメ版や映画も作られた。映画版『釣りバカ日誌』は、二〇〇九年までに計二〇話作られ『男はつらいよ』と並ぶ、松竹を代表する国民的映画シリーズとも言われる。

話は、ヒラ社員の浜崎伝助（ハマちゃん）とその浜崎の勤務する鈴木建設社長である鈴木一之介（スーさん）を中心に展開する。ハマちゃんはスーさんに釣りを教えた師匠である。会社内ではダメ社員とみなされているハマちゃんが、じつは社長であるスーさんやその友人である財界幹部と釣りを通じて懇意であり、彼らに対して同等かそれ以上の態度で接するという落差が、人気の源だと言ってよいだろう。

浜崎家は、伝介のほか妻みち子と一人息子の鯉太郎との三人で暮らす核家族。みち子は夫の趣味をなにやかやと言いながらも認めており、夫婦仲はきわめて円満である。伝介も子煩悩で、釣りの予定がない時には、鯉太郎の世話をよくするし、鯉太郎もなついて、そうした父親が大好きである。

さて、以上の説明から、すでに『釣りバカ日誌』が絶大な人気を博した理由は明らかではない

## 釣りバカ日誌①



141



140

イラスト4 やまさき十三作／北見けんいち画『釣りバカ日誌①』小学館，pp. 140-141.

だろうか。会社で一見評価されていないなくても、見るべき人は見ていてくれる。本当の実力は相当なものだ。妻と子供は自分を愛してくれている。趣味を第一に考えて、仕事は二の次に生きる。好きなことに没頭するのが一番。これは、サラリーマンすなわち男性勤労者の思い描く夢である。男性勤労者は『釣りバカ日誌』を読んだりその映画を観たりするたびに、伝介にわが身を重ね合わせる。彼は自分の理想の姿であり、彼の言動はカタルシスをもたらすのである。

こうした『釣りバカ日誌』は、核家族の家庭生活を描くことで『サザエさん』や『ちびまる子ちゃん』とは大きく違っているが、もうひとつ、近隣の人間関係がほとんど描かれず、それに替わって職場（会社）の豊かな人間関係が描かれているのも特徴的である。佐々木和夫，多胡賢一郎，宗優介，土井光三など，脇をかためるキャラクターのほとんどは，職場関係の人々である。伝介は，そうした人々と公私にわたるつきあいをしている。

『ちびまる子ちゃん』が描いたように，近代社会は子どもを家庭から切り離して学校へ隔離したが，同様に大人の男性を会社に隔離した。このマンガは，そうした二〇世紀後半の日本社会に一般的であった人々の生活の一面を虚構のなかに活写している。

『クッキングパパ』は、『釣りバカ日誌』の次の時代の生活を描いたものである。1985年に講談社の青年向けのマンガ雑誌『モーニング』に発表されて以来，100巻を超える単行本が出されている。テレビドラマ，テレビアニメにもなった人気作品である。

モーニングのHP（2016年7月現在）では，この作品は次のように紹介されている。



イラスト5 うえやまとち『クッキングパパ』講談社, 1986, pp. 154-155.

「食の街・博多。荒岩一味（あらいわかずみ）は仕事も家事も完璧にこなす元気なサラリーマン！！ 新聞記者として働く虹子さんは、家事はちょっと苦手だけどいつも明るく元気なお母さん。大阪で働く長男・まこと、そして中学生になった長女・みゆきの4人家族の食卓にはいつも笑顔があふれています。」 (<http://morning.moae.jp/lineup/2>)

この作品が、これまで取り上げてきたものと決定的に違うのは、妻が職業をもっているということである。夫婦共働きの核家族を描いているという点が、これまでのものとは大きく異なっている。日本社会において、就業する妻の数が家事専門家を初めて上回るのは、1992年であるが、第1節でふれたように男女雇用均等法が1986年に施行され、すでに働く既婚女性は珍しくなくなっていた。またバブル景気のさなかグルメブームが起きた。そうした社会状況を背景にして生まれた料理マンガが『クッキングパパ』であった。

『クッキングパパ』と『釣りバカ日誌』は、夫の趣味が「料理」であるか「釣り」であるかという違いがあるものの、核家族であることや登場人物のほとんどが主人公の会社関係者で占められている点では、とてもよく似ている。ただし、主人公のイメージはおおいに異なる。

荒岩一味は、身長180センチ、体重80キロの堂々とした体躯に、巨大なしゃくれた下あごをもつ男性であり、性格はいたって真面目で几帳面、人望も厚く会社では管理職を務めている。浜崎伝助の軽妙さ、ひょうきんさとは好対照である。また一味の妻、虹子は仕事のできる新聞記者であるが、酒豪で料理はもとより家事全般が苦手という設定である。一味は、そんな虹子を助ける

兼業「主夫」でもある。

このような『クッキングパパ』の生活は、高く評価されることもある。中野は次のように述べる。『クッキングパパ』では、それぞれに職業をもっている夫と妻が、同時にそれぞれに家事・育児の従事者でもある。共働き家庭に対してよくいわれる言葉に『妻に協力的な夫』というものがある。この言葉は、主たる家事・育児従事者が妻であることを前提した上で、『主たる従事者である妻に、協力するよい夫』という意味がこめられているように思う。このアニメではそうした関係を超えて、妻と夫が生活を共にするパートナーとして、対等に家事・育児に関わっている姿が描かれているといえるだろう」[中野1998, 132]

中野が指摘するように、共働き家庭に、「夫は仕事。妻は仕事と家事育児」という役割分担がしばしばみられるのは事実である。しかし、『クッキングパパ』は、逆に「妻は仕事。夫は仕事と家事育児」という生活を描いているとも言えないだろうか。一味は残業の合間に自宅に戻って食事を作り、また会社に戻る。子どもの具合の悪い時に仕事から急いで帰ってくるのも一味である。しかも一味は、その風体も頼りがいのある「ビッグ・ダディ」として描かれている。

『釣りバカ日誌』が男性勤労者の憧れを描いたように、『クッキングパパ』は女性勤労者の憧れを描いている。「家事育児ができる頼りがいのある旦那様さま」という女性就労時代の、女性たちの「憧憬」が結実したのが、荒岩一味という人物なのではなかろうか。

## 2-5. 脱家族時代

1990年代以降、家族を描いたマンガ作品はいくつかあるが、これまで紹介してきた作品ほどのヒット作はないし、またその内容も従来のいずれかのパターンを踏襲したもののように思われる。むしろそれ以後注目されるのは、家族を描くことよりも家族をつくる困難である。

家族社会学者である山田昌弘は、『パラサイト・シングルの時代』（1999年）において、親元に同居して親に依存しつつも未婚のまま消費生活を楽しむ若者たちを「パラサイト・シングル」と名付けた。エッセイストである酒井順子は、『負け犬の遠吠え』（2003年）で、「未婚、子なし、30代以上の女性」を「負け犬」とよんだ。これをきっかけに、「負け犬」という言葉は世間の流行語となった。また、フェミニストであり社会学者である上野千鶴子は、ひとりで老後を迎える人々の生き方を『おひとりさまの老後』（2007年）において論じた。そして近年では、結婚するための活動が「婚活」とよばれ、就職活動の「就活」と同列に扱われるようになってきている。

筆者は、上述の本において様々に言及されている、家族生活からは距離をおく人々の姿のなかに、「ヤマアラシのジレンマ」を感じざるを得ない。ヤマアラシは、体全体が棘におおわれている。寒い時には、互い身を寄せ合って暖をとろうとするのだが、互いの刺が相手を傷つけるために、寄り添うことができない。そのジレンマを「ヤマアラシのジレンマ」と言う。すなわち、「自己の自立」と「他者との一体感」の両立がうまくいかない、これが家族生活を前にしての今日の困難ではなかろうか。

戦後日本社会は、少しずつだが確実に変化し続け、それにともない家族の姿も大きく変わった。それは、すでにみてきたように『サザエさん』、『ちびまる子ちゃん』、『釣りバカ日誌』、『クッキ

ングパパ』といった人気マンガに描かれた家族像の変遷からあとづけることも可能である。こうした家族像の変遷の終着点は、結局、家族それ自体の否定なのだろうか。家族は、人間にとって基本的な親密圏である。人気マンガの世界で、地域社会という親密圏が会社という別の親密圏にとって代わられたように、家族という親密圏は、やがて別のものにとって代わられるのだろうか。

本章では、ジェンダーの観点から、ここにいたる家族の問題を考えてきた。次章では、家族をつくることの困難について、個人の行動様式のレベルに視点を移して、さらに考察を進めることにしたい。

### 3. 変わりゆくジェンダー

#### 3-1. ジェンダーの揺らぎ

近代人の安住地の喪失 (homelessness) を指摘したのはバーガーらであった [Berger1974]。前近代の社会にあっては、人々は安定した意味世界に暮らしていた。しかし、近代化は意味の多元化としてあらわれる。これをジェンダーの問題にひきつけて言えば、従来あたりまえとされてきた「男らしさ」や「女らしさ」が通用しない事態が進行する、ということである。

では、「あたりまえとしての男らしさ」「あたりまえとしての女らしさ」とは、具体的にどういうものであり、それはどのように変わってきたのだろうか。

この問題にかかわって、よく社会調査では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」とする考えについての賛否を尋ねて、その時系列分析から、ジェンダーの変化を探る方法がとられる。たしかにこれはひとつの方法だろう。しかし、この方法には問題がないわけではない。

第一に「夫は外で働き、妻は家庭を守る」のが、一般的な意味での古いジェンダーと言えるのかという問題がある。農家や自営業の家庭では、夫も妻も田畑や店工場で働くのが普通である。しかし、だからと言って性別の役割分業がないわけではなく、夫が代表者等で重要なことについての決定権をもっている場合が多い。そうしたことを考えると、この問いは、『サザエさん』や『釣りバカ日誌』のような勤労者家庭を前提して初めて成り立つ問いであるように思える。

第二に、この問いに接した少なからぬ人は、家庭状況による、と考えるのではなかろうか。たとえば、病弱な夫を無理に働かせても、健康で勤労意欲の強い妻は家に閉じ込めておくべきだという人は、おそらく多い。実際、内閣府の調査では、この質問に対して明確に「賛成」、「反対を」と答えた人よりも、「どちらかといえば賛成」、「どちらかといえば反対」と答えた人が常に上回っている [内閣府2014]。

先にも述べたように、ジェンダーを職場や家庭への単純な参加として把握したり、意識調査によって数量的に把握したりすることには、おのずと一定の限界がある。そこでここでは、ふたたび人気マンガを手がかりにしてみよう。

#### 3-2. 『クレヨンしんちゃん』にみる男性ジェンダー

『クレヨンしんちゃん』(作: 臼井儀人) は、1990年に双葉社の青年向けマンガ雑誌『週刊漫



71



70

イラスト6 白井儀人『クレヨンしんちゃん1』双葉社、1992年、pp. 70-71.

画アクション』に登場し、1992年からはテレビアニメが放映されている。映画やテレビゲームとしても人気をよび、海外の多数の国にも紹介されていて、中国では商標権問題を引き起こして話題になったりした。

主人公野原しんのすけ（しんちゃん）は、5歳の幼稚園児。埼玉県春日部市の一戸建ての家に、父ひろし、母みさえ、そして（後には）妹ひまわり、と暮らしている。ひろしはサラリーマン、みさえは家事専従者（主婦）である。設定は、『釣りバカ日誌』に比較的に近いが、伝助と違ってひろしにはこれといった趣味はなく、むしろ、しんのすけとみさえとの日常のやりとりが話の中心である。

しんのすけの性格や行動様式をまとめれば、以下の八つの特徴を指摘できるだろう。

第一に伝統主義。それは自分のことを「おら」とよぶことに端的にあらわれている。しんのすけの風貌そして名前も、父よりもむしろ祖父の野原銀の介に似ている。また友人に風間トオルというお金持ちの子どもがいるが、彼が近代的な人物として描かれているのとは対照的だ。

第二に性的関心の高さ。彼は下半身を露出することに何のためらいもない。というよりも、それを好む。また若い女性が大好きで、大人がしたら間違いなくセクハラと言われる行為を平気でする。

第三にパターナリズム。彼はいざという時には、危険や悪者から、母や妹、あるいはそのほかの女性をわが身を犠牲にしてでも守ろうとする。



第四に反権威主義。彼は社会的に高い地位にある人に対して媚びるようなことは絶対しない。だから幼稚園の園長先生などはしんのすけに翻弄されっぱなしだ。

第五に非暴力主義。彼は肉体的な暴力を使わない。彼の武器は言葉と知恵である。この点で対照的なのは母のみさえである。彼女はしんのすけをつねったり殴ったりを日常的にしている<sup>2)</sup>。

第六にリーダーシップがある。幼稚園のともだちのなかではもちろん、それ以外の人々の間でも、話を進める展開力はしんのすけが握っている。

第七に英雄主義。彼の憧れは「アクション仮面」という虚構のヒーローであり、一人孤立してでも悪と戦う姿を理想としている。

そして、第八に正義感が強い。彼に悪者とみなされた者は徹底的に否定される。しんのすけが去った後にも悪役には制裁が続くというのは『クレヨンしんちゃん』によくある終わり方である。

さて、野原しんのすけは、なんと男らしい男ではないか。これら伝統主義・性的関心の高さ・パターナリズム・反権威主義・非暴力主義・高いリーダーシップ・英雄主義・正義感の八点によって特徴づけられる男性ジェンダーを主人公のイニシャルをとって、N型ジェンダーとよぶことにしよう。

### 3-3. 『美少女戦士セーラームーン』にみる女性ジェンダー

『美少女戦士セーラームーン』(作:武内直子)も、海外でも有名な人気マンガである。その作品は、1991年に講談社の少女向けマンガ雑誌『なかよし』に連載され、テレビアニメ、テレビドラマ、映画になったほか、ゲームやミュージカルにもなっている。『クレヨンしんちゃん』が青年男性向けのマンガだったものが、子どもや女性に人気を拡大させたのとはちょうど逆に、『美少女戦士セーラームーン』は少女向けマンガから、大人や男性に人気を拡大させた。

主人公月野うさぎは、中学二年生。雑誌記者の父親、家事専従者の母親、弟と暮らしているが、ストーリー展開において、こうした家族の影はきわめて薄い。基本的にストーリーは、シリーズによって若干の違いがあるものの、話の前半に悪者に襲われる被害者の生活や仲間とのやりとりのシーンあり、毎回後半に、うさぎが正義の戦士「セーラームーン」に変身して、仲間のセーラー戦士らとともに敵と戦うというものである。

『美少女戦士セーラームーン』の主人公、月野うさぎ=セーラームーンの性格と行動様式を野原しんのすけと同じく、八つの特徴にまとめることにしよう。

第一に保守主義。セーラー服や長い髪に象徴的にあらわれているが、うさぎは基本的に変化を好まない。毎回の話は、悪者によって乱れた秩序が旧に復して終わる、というものである。

第二に実感主義。セーラームーンの戦いは、自分の知り合いが襲われるというところから始まる。ともだちをいじめたことが戦いの正当性になっている。

第三に平和主義。セーラームーンは自分から戦いを仕掛けることはしない。戦いは常に防衛であり、したがって自分や仲間の安全が確保された段階で話は終結する。また光線や波動で相手は倒され、戦闘の残虐さは覆い隠される。なんと敵は最後に「ラブリー」と叫んで消えることもある。

第四に集団主義。一人(匹)の敵に対して、何人もの仲間で立ち向かう。まるでイジメある。



イラスト7 武内直子『美少女戦士セーラームーン1』講談社、1992年、pp.182-183.

時には二匹の猫の助けを借りることもある。さらに言えば、いじめられるのは常に醜いキャラクターで、いじめる側は美少女たちだ。

第五に男性依存。戦いの相手は、ほとんど女性(メス)である。彼女がピンチになるとタキシード仮面という男性が現れ、薔薇を投げるというしごく簡単な攻撃で敵をひるませ、セーラームーンを助ける。セーラームーンはタキシード仮面を「タキシード仮面さま」とよんでいる<sup>3)</sup>。

第六に権威主義。貴族、お金持ち、知的あるいは身体的能力の高い人に、強い憧れとコンプレックスをもっている。

第七に宿命論。自分が変身して戦う理由もセーラー戦士が仲間になる理由も、すべて宿命だと納得している。主人公はもとより、登場人物も含めて、世界には非合理的であらがい難い力がはたらいていることを暗に認めている。

第八に自尊心の隠蔽。「ドジで間抜けな女の子」を自認しているが、じつは前世ではお姫様であり、セーラー戦士たちは家来という設定である。しかし、仲間たちの前では、そうした自尊心は微塵もみせない。

こうした保守主義、実感主義、平和主義、集団主義、男性依存、権威主義、宿命論、自尊心の隠蔽という八つの特徴をもつジェンダーを同じく主人公のイニシャルをとってT型ジェンダーと

名付けよう。こうしたT型ジェンダーは、たとえば女性向け週刊誌等にも散見されるように思われる。

### 3-4. N型ジェンダーの新しさとT型ジェンダーの古さ

N型ジェンダーは『クレヨンしんちゃん』の野原しんのすけだけにみられるものではない。同じく1990年代の人気マンガである『名探偵コナン』(作:青山剛昌)の主人公、工藤新一=コナンにも、程度の差はあるものの当てはまっている。

ところで、野原しんのすけと工藤新一には、「小さな男」という共通点がある。これは隠喩として考えるべきだろう。すなわち、「小さな男」は、暴力的な優越性をもたない。野原しんのすけも工藤新一も、腕力は弱い。彼らとは対照的に、しんのすけの母親みさえはヒステリックに暴力をふるうし、新一のガールフレンド毛利蘭は、空手部の主将で相当の腕前である。

N型ジェンダーの特徴のひとつである非暴力主義は、従来の男性ジェンダーからは逸脱したものであろう。伝統的な価値観から言えば、すぐれた体躯は、男性として好ましい特徴である。しかし、そうした逞しい肉体は、どうしても暴力性を連想させる。N型ジェンダーの男性は、そう



イラスト8 青山剛昌『名探偵コナン1』小学館, 1996年, pp. 60-61.

した暴力性をはく奪された存在，去勢された存在であり，今風に言えば「草食系男子」である。近代社会が進展するにつれ主知主義化も進行する。知識社会にあって，肉体的な優越はかつてもっていた価値を減じざるを得ない。N型ジェンダーとは，そうした社会が生んだ男性ジェンダーなのかもしれない。

一方T型ジェンダーは，今日の日からみると，すでに時代遅れのジェンダーと言えなくもない。それは，2004年からテレビアニメとして放映された，同じ「美少女戦士アニメ」である『ふたりはプリキュア』（作：東堂いづみ）と比較するとよくわかる。

『ふたりはプリキュア』では，男性の敵を相手に，壮絶な徒手空拳の戦いが行われる。そこには『美少女戦士セーラームーン』におけるタキシード仮面のような，助けてくれる男性は登場しない。すなわち，平和主義や男性依存というT型ジェンダーの特徴は，かなり弱まっている。ただし，女の子同士の連帯＝集団主義という特徴はここでも健在である。かわいいマスコットキャラクターが登場して，女性同士が助け合って相手を倒す。それはまるで母子家庭の助け合いをみるようでもある。

T型ジェンダーが時代遅れだと感じられる要因には，現実の世界において働く女性が増えたことがある。今や女性が職場で男性に伍して働くのは普通のことだ。彼女たちは，男性が自分のこ



イラスト9 上北ふたご画／東堂いづみ作『ふたりはプリキュア1』講談社，2005年，pp. 20-21.

とをかばってくれるばかりの存在ではないことをよく知っている。だから『美少女戦士セーラームーン』のように「女の敵は女」の世界がかえって異常であるように感じる。最近のマンガには、よしながふみの『大奥』（白泉社、2005年）のように、社会の支配者としての女性を描く作品も登場しているが、それはまさにこうした社会変化、人々の意識変化の延長上に生まれている。

まとめるならば、人気マンガをみる限り、男性ジェンダーから暴力性が減じる一方、女性ジェンダーは、より戦闘的になって男性依存という特徴を減少させつつある。こうした人気マンガのジェンダーの変化は、現実世界における男性の脱権力化、女性の自立というジェンダー変化と連動していると考えべきだろう。

#### 4. ジェンダーの現代的位相

「サザエさん」「ちびまる子ちゃん」「釣りバカ日誌」「クッキングパパ」にはそれぞれに、その時代のジェンダーが色濃く表れていた。それらをあらためてまとめるならば、次のようになるだろう。

「サザエさん」には、戦後の民主主義の進展と女性のイエ制度からの解放。「ちびまる子ちゃん」には、大衆社会の到来と子ども中心の家庭の誕生。「釣りバカ日誌」には、家族成員数の減少、勤労者核家族の増大と主婦役割の定着。近隣ネットワークの減少と職場ネットワークの増加。「クッキングパパ」には女性の賃労働進出と男性が家事育児へ参加することへの社会的期待の増大、である。そして、これらのことは、とりもなおさず男性ジェンダーと女性ジェンダーの漸次的変質解体を意味した。

この間、男性に比して女性に起きている変化はきわめて激しいものだった。先述したように、それはまず女性の「家」から解放としてあらわれ、働く夫に奉仕し子どもを立派に育てる「主婦」としての役割強制、そして家計の助けと自己実現のための職業労働の参加の奨励へと進んだ。一方、この間の男性ジェンダーの転変はそれほど大きなものではない。男性ジェンダーは、資本主義の進展にとまなう知識社会化に対して、肉体的な暴力性という特徴のひとつを減じることで対応してきたことを指摘できるに過ぎない。

男性ジェンダーと女性ジェンダーを一對のジェンダーとして考えた場合、ここにみられるのは、一種のカルチュラル・ラグ（文化遅滞）と言ってよい。すなわち、女性ジェンダーの変化の激しさに男性ジェンダーが対応しきれていないのである。

一例をあげよう。2008年大ヒットした宮崎駿のアニメ映画「崖の上のポニョ」は、小さな男の子（！）が、ポニョという女の子の人魚と出会うところから話が始まる。男の子が、ポニョに言うセリフは象徴的だ。「だいじょうぶだよ。ぼくが守ってあげるからね」。こうした男性に対するパターナリズムの期待は、今も根強くある。

しかし、パターナリズムは、しよせん支配の一形態である。T型ジェンダーをもつ女性には心地よくても、そういう女性はもはや一般的ではない。そこでN型ジェンダーをもつ一般的な男性はどうすべきか戸惑うことになる。現代の日本社会において、適齢になっても結婚しない独身者が増え続ける要因のひとつには、こうした文化的不一致が存在するのではなかろうか。



イラスト10 原作・脚本・監督宮崎駿／アニメージュ編集部編『崖の上のポニョ 1』徳間書店，2008年，p. 83.

近代社会は、性別年齢別分業の社会であった。近代社会において男性、女性、子ども、若者、大人、老人は生きる世界を分断させられた。大人の男は会社で「しごと」を、大人の女性は家庭で「くらし」を、子どもは学校で「まなび」を、若者は街で「あそび」を、老人は地域で「いこい」をするのがあたりまえとされたのである。ところが20世紀末ごろから、こうした社会に大きな変動が起きている。互いを隔てていた垣根が低くなり、生涯学習、男性の家事育児、女性の就業、ボランティア、インターンシップ等など、それぞれの主体が、互いの領域を越境し始めている。

近代社会の人々は、それぞれの生きる世界に、男女別あるいは年齢別の同質的な群れをつくった。神島二郎は、かつてこうした群れが集まって社会が構成されていることを「群化社会」とよんだ。そして、こうした同質的な群れが寄せ集まってひとつの社会が形成されたのが、日本社会における近代化の特徴であると述べたことはよく知られている〔神島1961〕。

しかし、現代日本社会が問われているのは、これまでとは違って、異質な構成員、文化的に異なる者が混じった、これまでは違う「群れ」が可能であるかということである。異質なものの同士の間には軋轢が発生しやすいから、それはたしかにストレスである。そして、肥大化した個人意識もあって、その試みには、常にヤマアラシのジレンマに陥る危険性がつきまとう。これは、よく知られたマックス・ヴェーバーの言葉を借りれば、われわれの社会の「時代の宿命」な

のかもしれない。

はたして異質性の共存は可能だろうか。そのような男女共同参画社会は、目指すべき将来の社会像である。しかし、振り返ってみよう。マンガやテレビアニメに夢中になった、子どもの頃の集合的記憶に、目指すべき社会の原型がありはしないか。

かつての地域社会においては、子どもが群れて遊ぶのは日常的な光景であった。遊びの群れのなかでは、男の子も女の子も一緒だったし、そのなかには、ルールもわからぬ小さい子も混じっていた。子どもたちは、そういう小さい子どもを遊びのルールの適用外にして、遊びのなかに入れてやったものだ。そういう子のことを一般的には「みそっかす」と言ったが、それ以外にも地方によって、様々な呼び名があったようである。性も年齢も異なる者たちがひとつの集団を形成して、楽しくやってくことは、たしかに工夫は必要であるが、けっして不可能なことではない。

今後、日本社会は、親密圏においても、また公共圏においても、そうしたかつての子どもたちの遊び集団がもっていた、豊かな寛容性を蘇らせることができるのか、まさにそれが問われていると言えるのではなかろうか<sup>4)</sup>。

## 註

- 1) 同じデザインのポスターも作られた。
- 2) 中野恵美子は、「これほどに母親の暴力に合うアニメ・キャラクターもめずらしい」として、これは「子どもの権利条約」に違反していると指摘している。[中野1998, 125]
- 3) 齋藤美奈子は、「王子とは、父親の地位と財産をカサに着た、ハンサムな男の異称である。その末裔がタキシード仮面だったとしたら、これまた一種の先祖返りといわれても仕方がないだろう」と的確な指摘をしている。[齋藤2001, 147-8]
- 4) 本稿は、もともと学部時代の恩師の一人である矢澤澄子東京女子大学教授が定年退職する際に企画された論文集に寄稿したものである。だからこの原稿は2008年8月にいったん出来上がっている。ところが諸々の事情でこの論文集は刊行されず、その一部分は、その後、別の論文[早川洋行, 2014]に転用したものの、大部分はそのままになっていた。この度、先輩であり同僚でもある岡澤憲一郎先生が定年退職するにあたり、記念論集に何を書こうかと考えたが、ふとそのことを思い出して、御蔵入りになっていたものを取り出し、全体的に見直し修正加筆して掲載させていただくことにした。敬愛するお二人の先生に感謝を込めて捧げたい。

## 参考文献

- 上野千鶴子 (1990) 『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店。  
上野千鶴子 (2007) 『おひとりさまの老後』法研。  
Weber, Max (1922) *Soziologische Grundbegriffe*. 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波文庫, 1972。  
神島二郎 (1961) 『近代日本の精神構造』岩波書店。  
齋藤美奈子 (2001) 『紅一点論』ちくま文庫。  
酒井順子 (2003) 『負け犬の遠吠え』講談社。

- 作田啓一／多田道太郎／津金沢聡広（1965）『マンガの主人公』至誠堂新書。
- 鳥越皓之（2008）『「サザエさん」的コミュニティの法則』NHK出版生活人新書。
- 鶴見俊輔（2006）「サザエさん」鶴見俊輔／齋藤慎爾編『サザエさんの昭和』柏書房。
- 内閣府（2014）「女性の活躍推進に関する世論調査」。
- Naumann, Nelly（1994）野村伸一／檜枝陽一郎訳『山の神』言叢社。
- 中野恵美子（1998）「テレビアニメにみる日本の家族像—サザエさん，クレヨンしんちゃん，クッキングパパより」村松泰子／ヒラリア・ゴスマン編『メディアがつくるジェンダー—日独の男女・家族像を読みとく』新曜社。
- 早川洋行（2014）「ジェンダーと現代一性の束縛からの解放」船津衛・山田真茂留・浅川達人編『21世紀社会とは何か—「現代社会学」入門』恒星社厚生閣。
- 樋口恵子（2006）「サザエさん・人気の秘密」鶴見俊輔／齋藤慎爾編『サザエさんの昭和』柏書房。
- Berger, Peter, L., with Brigitte Berger and Hansfried Kellner, (1974) *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*, 高山真知子他訳『故郷喪失者たち—近代化と日常意識』新曜社。
- 矢原隆行（2007）「男性ピンクカラーの社会学」『社会学評論』231号
- 山田昌弘（1999）『バラサイト・シングルの時代』ちくま新書。